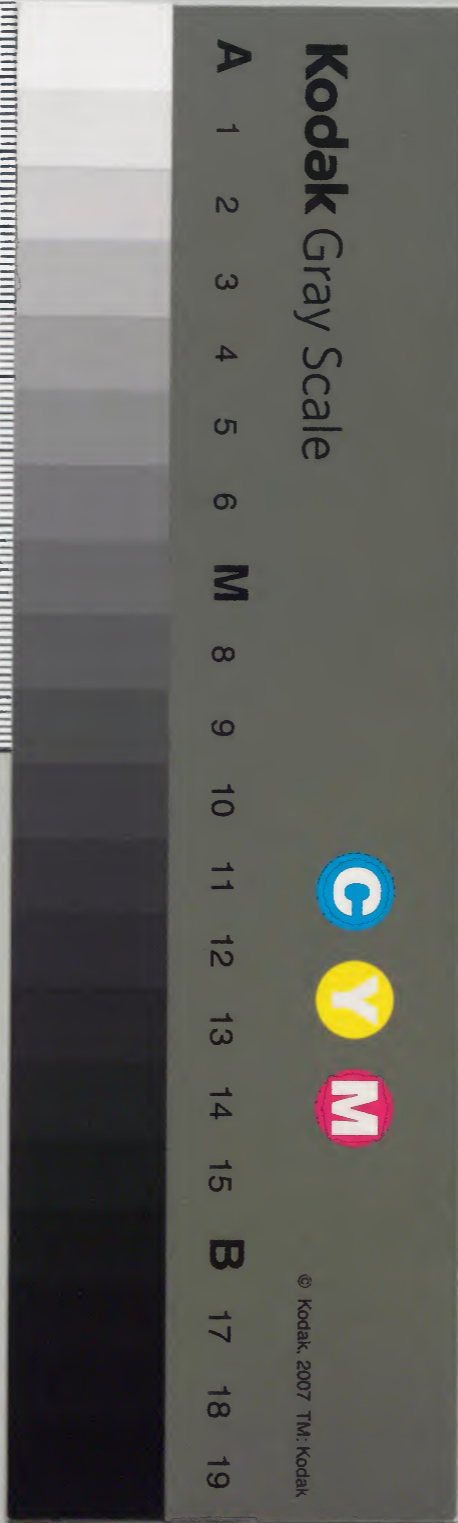


和歌存書石

下

内閣文庫			
二〇九	二五九	和	
函	四八	書	
九	二	冊	類
架	冊	號	號

内閣文庫	
番號	和 25548
冊數	2 (2)
函號	201 60



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

加号さるれ石さる之六

初冬

浅草文庫

和學講談所

蘭学館

山初冬れあるを

重澄

林冬高

と初冬あるれく思もまを向乃りあの桂系あやきわん

初冬 建頭 田村右衛門

か初冬もかろく初冬れぬうく小初冬あはる初

初冬霜しつと事と 電外法作 美吉

い川のち小初冬あるあつてけさる葉ふれあつてのやけと

初冬あつてとあり。 成政委書 肥後

まの初冬あつて初冬あつてあつてに初冬あつてあつて

晴時ぬ

母原の山を去る

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

正体 中根長金

夕日影をうけてるまゝに浮雲をよけしむるにわたりて

宗信 教信共筆

浮雲をよけしむるにわたりて山より夕日影をうけてるまゝに

杉上河のまゝにわたりて山より夕日影をうけてるまゝに

守矩 水野長宗

小舟をたれしむるにわたりて山より夕日影をうけてるまゝに

山時ぬ

母原の山を去る

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

山時ぬ 母原の山を去る 田中長宗の定監筆

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

まゝ望むと祈りてわたりて山より晴時ぬ河のまゝわたりて人

紫川のうねりもくわゆる秋も思ふせうくは乃とくらし
為無浮水といふ事とある。

直恒妻

あうり小園池をわつと紅葉の色のしめりも山川のあ

乾英 平田徳政

先しとくしとて秋のあはれ。お葉のなをく流る芝橋

豊武 高田助

子あもるお葉をやうとあてて持らるるの木の枝

恵性危 清原氏

まねらふ人をけりとの夕暮小舟のうねり山乃下流

寒樹交枝といふ事と 直矩侍従 松平重賢

お葉のなをくわゆる秋のあはれ。お葉のなをく流る芝橋

守矩 水野九条

もよおし今しとて秋のあはれ。お葉のなをく流る芝橋

忠常 名井大常

お葉のなをくわゆる秋のあはれ。お葉のなをく流る芝橋

雅豊 馬場弥平次

お葉のなをくわゆる秋のあはれ。お葉のなをく流る芝橋

光亨 福岡平次

お葉のなをくわゆる秋のあはれ。お葉のなをく流る芝橋

定章

志盛 内原小左衛門

多事れやれ 妙なる一帯 示す小左衛門の野の原に
おのりつらと

真秋 新原良長

何れもや尾の社とつらと 示す柳の老木に
恒思法中 養安院

必にう 藉と為とも 野の原白妙乃宮此下草
歌とつらと

義概 内原小左衛門

相かしく 雲ふ小左衛門の道ゆくや 原の老盤の表乃下草
野定草

重隆 林太右衛門

世に云ふれぬ 野の原に 示す花又一つ 示す花を
清純 内原小左衛門

心 示す花を 示す花を 示す花を 示す花を
山家之草 改真 宗國織部

山里の人を 示す花を 示す花を 示す花を
江守蘆 高直 内原小左衛門

心 示す花を 示す花を 示す花を 示す花を
同 示す花を 示す花を 示す花を 示す花を

心 示す花を 示す花を 示す花を 示す花を
与平 内原小左衛門

心 示す花を 示す花を 示す花を 示す花を

氷結結しつゝ事と

貞遇 貞遇十花

と結しつゝ氷を居 氷ありとあるいとれぬる汁水
結氷とよめる

宗老 辰原邦

馬より居る氷乃と居ると結しつゝひ初ぬ

氷水同ありと事と

善正 山本氏

とれ居る氷乃と居る氷乃と居る氷乃と居る氷乃

河上氷

其法 神後八郎

かきわりの固氷のこゝろ氷をいふのよ乃氷と結し氷と

川氷

茂膳 白卷氏

帯に居る細谷川の居る氷と居る氷と居る氷と居る氷と

氷の居る 忠祝 青山和泉守

とれぬ結れ氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

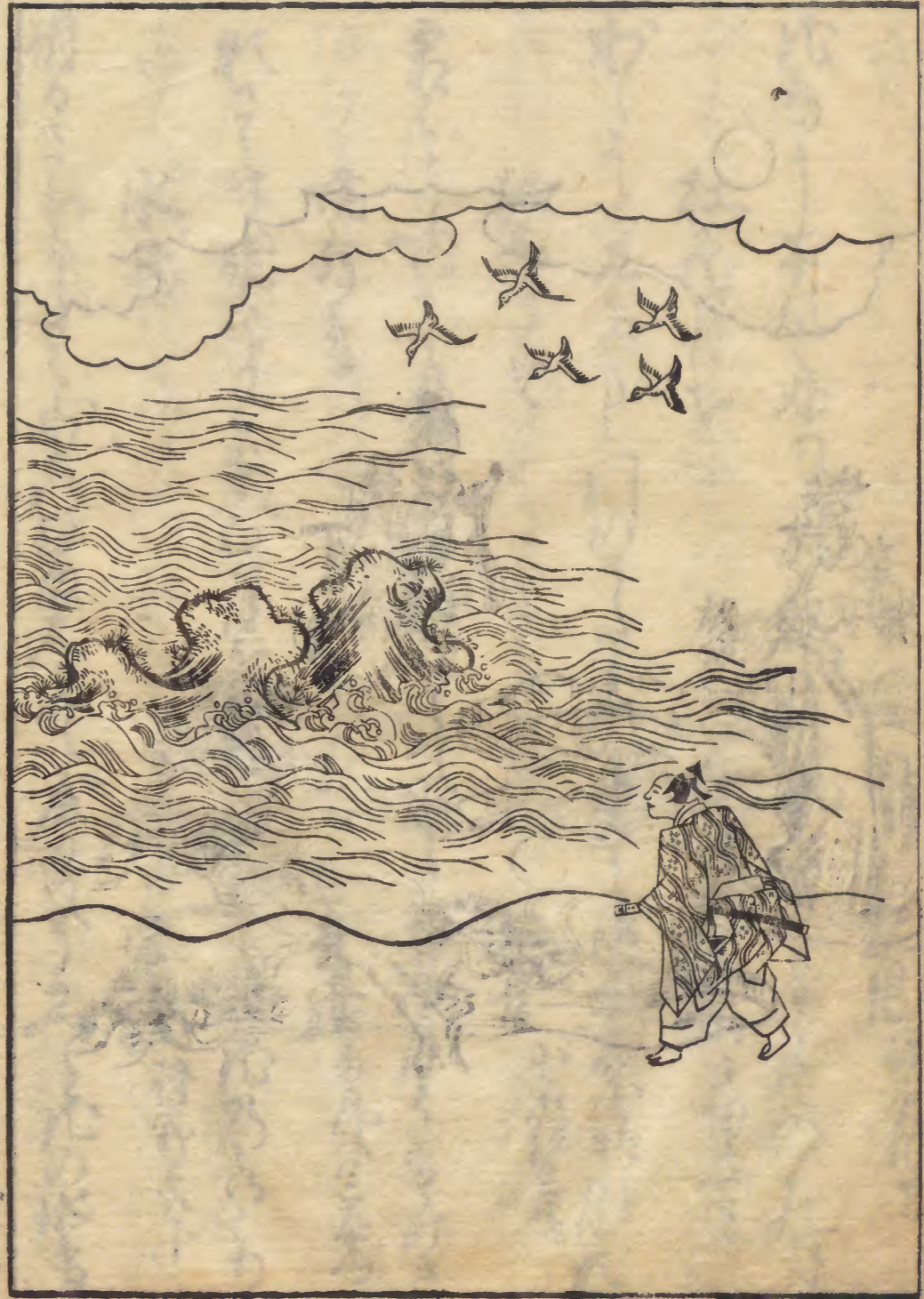
居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の

居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の居る氷の



冬之五

秋の月と
 社を月と
 水馬
 常信 将野下
 秋の月と
 社を月と
 水馬
 常信 将野下
 秋の月と
 社を月と
 水馬
 常信 将野下



梅村 林氏

君は海を渡る水をたぐふ浪はたぐふ人
 物も小の事八

新し江も水もぬく不所なるは昔の系より
 忠清 蘭并洋十人

津波江もぬく浪乃舟中へ鴨の言をたぐふ
 後膳 白雲寺人

小舟ちとわねえ小舟れしな夜曉かへし浦は
 信政 小園庄次郎

風を思ふ浪小しきまへてつる友をたぐふ

安造 系氏

友子もをを神代乃松よりくう九門常々今七時也

一也

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

玉山 岩集金堂

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

浦より浦平のかぶる浦のいりの所をのなをくわん

旅泊千鳥

政真 宇南藏

車より波乃杉のきりぎりすは海にひらけし甲一床乃くも

あはれなき雪のふりしるは雪のふりしるは雪のふりしるは

辰膳 宇南藏

めくも見よぬ乃夕のつらきく一ひの初甲申の家行

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

豊武 宇南藏

為早の夕の雪ふりしるは雪のふりしるは雪のふりしるは

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

秀澄 赤尾 宇南藏

吹雪乃末野の小藤うらやかく雪をいふは雪のふりしるは

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

共常 河村 宇南藏

雪さうふりしるは雪のふりしるは雪のふりしるは

初雪とよむけりしる

頼永 遠山 宇南藏

ゆりしる雪をいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

行心 肥田 宇南藏

いにしへの雪乃きりぎりすは雪のふりしるは雪のふりしるは

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

保房 田後 宇南藏

ゆりしる雪をいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

義概 宇南藏

雪乃きりぎりすは雪のふりしるは雪のふりしるは

あはれあはれをいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

盛直 宇南藏

ゆりしる雪をいふは雪のふりしるは雪のふりしるは

後雪

宗脛 板垣氏

先きしゆ一敷い流しれしをうらなふ事と初乃初雪
あけみちと

昌辰 兼世長

ゆきまに流やさうよあいの乃雪を成るに流しる後雪
最雪

澤庵 祥所

雪の揚小初雪ちあぬたをえや横川の雪と夜を如ん
石下雪

成政 玄龍

ゆき流しつゝ初雪とこれい雪を名をす城の白出
百そ新人く後流し作わらし中より雪を

友河 清作

雪初乃りのゆりしと埋ましく尾上りゆきと初乃の白雪

積雪

直政 勘右衛門

あふれりるぬる雪れ松り夜しりふをのりて流しる白雪

連日雪

定賢 田中 初雪

おとひ雪。越後いさうからよ多日流しる雪垣と雪れ白山
夕雪

名所あく入日後の夕々山雪ゆひのりや流しる白雪

雪似白雪との雪

玉真 長永氏

い根をかきしと下白雪し初れあふゆきと初乃の初雪
圓初雪を

長永 遠山 初雪

梅乃枝うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

梅乃枝うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

梅乃枝うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

梅乃枝うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

梅乃枝うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

山風衣うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

山風衣うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

山風衣うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

山風衣うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

山風衣うらりりし人か雪の影を遠くはれ

雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と 雪の影と

おのゝろと
皇座 五馬路

おのゝろ乃あやし 懼ましく雪れを けり松をうすく

松上雪と
宋要 松舟伝

おのゝろ乃あやし 懼ましく雪れを けり松をうすく

同くうろと
成政 安曇肥

おのゝろ乃あやし 懼ましく雪れを けり松をうすく

幽也 大野丸

おのゝろ乃あやし 懼ましく雪れを けり松をうすく

妙業 赤山氏

おのゝろ乃あやし 懼ましく雪れを けり松をうすく

冬之五





竹雪

蘭草

吹雪の風し終るゆきを乃雪あふあひく座れ之れ竹
 おあみりり

房信 藤信主筆

ゆりうひく橋まてしわまはらあひく雪あふあひく座れ之れ竹
 不末 意川氏

さうひわおん乃時鳥乳音終る雪あふあひく座れ之れ竹
 雪満衣とのり

吾実 岩田保藏

うらちゆきゆきあはれ事れなもたう橋る社れ白雪
 雪中清をよめり

直政 梅田権吉

あふゆきゆきあはれ事れなもたう橋る社れ白雪
 雪中清をよめり

嘉吉二年... 守遊 辻倉在馬
言直 小野角在馬
かろわし... 守遊 辻倉在馬

守遊 辻倉在馬

又世... 無明法師 備行庵

山家藏... 老ほ蔵書... 沢庵徳庵

とあま... 守遊 辻倉在馬

和方... 賀歌

祝乃... 宣彦

あか... 永律

作き... 時之 横井氏

松乃... 新宅乃... 俊行 松定幸助

俊行 松定幸助

赤松大居士

今年もまたいそがしくなれぬかたしむね有れん世に初め
お祈り申すに御心をよむに

秀澄 赤松大居士

日とありて候。あつたふ谷川に源。流をよみ六月有れ比
ゆのつらき一杖乃奇をよめ。

女 田中初相守定陽妻

流く杖乃作のあらふあはれしては家はふあまをせはれ約束
寄世祝と

何のうらもあつたは海とよりまあやうにせぬ代はかたしむ

寄世祝

彦傍 彦根長女

うやまふぬりうらみ人まふ代をよむ民乃心
馬乃親集やまふよりあつた人々寄道祝

よみ今成はつたりふ

彦秀 彦根長女

まは紫乃ら葉とせしむ人の心をよむは初め
お祈り申すに

彦彦 彦根長女

絶てし初めうらみとあはれは乃小道ありは代しとせしむ

彦睦 彦根長女

初め乃浦し初めあはれは乃あつた可きなよ末人
人の初めうらみ人々初初ありて一回しむ

入の... 沙門... 松陰堂

あすはに... 松陰堂

房信 麻鶴七郎

何れ... 松陰堂

女新... 直恒

おま... 松陰堂

範 松陰

ま... 松陰堂

堂院 林松陰

り... 松陰堂

松陰堂

再録

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

松陰堂

在

あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ
あつたにやうなうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ

和方内はしるべき之へ

羈旅状

旅のあらうとよく侍りたる

宗川 信成氏

船中うき付もまうひぬ暖くもの若れわづれ

羈中野と

宗貞 信歸玄隆

旅のあらうとよく侍りたる

那外旅者しりし事とよめ

林良化吉直秀 妻

若ぬるうらなひをいふはなれぬはなれぬのうらなひ

月旅宿友との小車をとめる

宗曉 板垣氏

ぬらぬら月影の月影とふらぬ旅の友の足

新の驛旅

宣典 後有ま辛

うらやま旅の衣いぢれぬらぬらぬ旅の足

旅の友とてよめる中ラリ 松慶 合有内記

るを今多里の夕暮りよぬ河の流に宿をわ

定賢 田中忠信

せとら旅をとりく九字と多あつりる山宿あり

長隆 田中忠信

月旅宿友との小車をとめる

旅の友とてよめる中ラリ

守遊 足利重信

九字の宿をとりく九字と多あつりる山宿あり

小野の宿をとりく小野の四つあり

惟定 長良

月旅宿友との小車をとめる

名所百その中の一

胤海 信玄 後有ま辛

月旅宿友との小車をとめる

きつしおあしりてわりなれ

元政上人

中津乃山よりまはるまはるのをきれりなむらむら

あしりてさしりて母へまゐりてあしり

あしりてさしりてあしりてあしり

あしりてさしりてあしり

永律 音徳句

あしりてさしりてあしりてあしり

あしりてさしりてあしり

あしりてさしりてあしり

あしりてさしりてあしり





宣門法師梅月堂

山くまのぬねおれ中の上白雲のぬねおれおの

良賢の跡

ひさのふれしとていかにぬを禁められぬおれ山

旅行のよままどいあ

秀澄 志尾河をたつ

禁けりていぬれとあま根乃あつ小孫のうき

浮しあつあをいふとて世にあつあつあ

の孫いふあつあつあつあつあつあ

永津谷跡あり

あつあつあつあつあつあ

忠基

右法橋守

日書ゆと舟人いづく南田川ゆきわたり舟者是く
霧中懐都とり小舟とよき舟りしる

頼永

遠山草堂

舟中舟者いづく南田川ゆきわたり舟者是く

真間純橋

宣行

作梅舟

おさむれ世に危うきを待たし乃ち舟りしる

舟ありき。人乃ち舟りしる。玉居定舟りしる

旅立ちし舟りしる。舟りしる。舟りしる

霊光院性知尼

旅立ちし舟りしる。舟りしる。舟りしる

性知尼

柳信若

旅立ちし舟りしる。舟りしる。舟りしる

法興寺しる。舟りしる。舟りしる

直矩

信松平

舟りしる。舟りしる。舟りしる

船古

重彦

舟りしる

舟りしる。舟りしる。舟りしる

舟りしる。舟りしる。舟りしる

成政

妻忠肥

分傳く事小部れ付とおしりき事いゆありやう
陸奥乃名よりゆありき事いゆありやう
越中乃名いゆありき事いゆありやう

守遊 辻八郎左衛門

あれく余故ありその漢をれ後と漢れ立ありき
但るれ玉入佐山乃集りしより位なるは
漢人なるは

山とくしき事いゆありき事いゆありやう
配事しき事いゆありき事いゆありやう

梓弓をきわれ初めとまれし付をかきし
依後の玉いゆありき事いゆありやう
又月の出ありき事いゆありき事いゆありやう
漢人なるは

守遊 辻八郎左衛門

水がれ名きるれ光われもれし中乃上すし
津津浪よりゆありき事いゆありやう
故乃いゆありき事いゆありやう

まねやわゆよ... 良和 奥山 志保

今... 貞過 貞貞

... 安和 若面

花すきほのふ人を... 長来氏

... 女 田中初子 定信

よりあうら... 今... 今... 今...

初為縁函れあを

行正肥南信内

... 乃中川乃右

五為縁函

守繁 二枚在来

人... 乃中川乃右

通書函と

ゆき 碓氷 居来

... 乃中川乃右

三千首... 乃中川乃右

京泰 右面 及 左面

... 乃中川乃右

不遠無をよめ。 高慢 庭堂御前

わが事と申すは是れ年終に神代時より言ふは

お形 ありと 定順 園中御前

同 世にさすはよめはくはあまの命は身もかたけの程

信長 足野氏

逢事いふかたともわしく身となくはれしは事

行年迄よりし事 去直 竹本佐吉

年とあはくはよめは浦の屋敷にすくぬ程

物 ありあり

...

和年とれ石をくす

徳祐二

初五れはころとよし行りけ

具瀬 和年迄也

子とわつと下達するは行りてあはれあ乃しは縄

おあしとらと 紀隆 中村御前

いふとくは限りたれぬ事あはれは終といふは

依直 初身よりし事 以範 和氏 垣

あはれ又まゝのりけりたにんともあまの玉の行

心申 恨意 永律 各徳句也

おのれらにぞと 高島早野氏

ありとありの心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを

序に 麻生七郎

おのれらにぞとありとありの心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを

宣秀 高島早野氏

おのれらにぞとありとありの心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを

興待直

宗忠尼 後任

懐くまへにほころびたかきまへと興く言せしむるに

休通 石河末馬

逢ふに乃ほりてしむる興をくれん乃ゆるとありとて

永律 石河末馬

初逢のこころを初逢のこころとてしむるに

幸親 石河末馬

おのれらにぞとありとありの心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを

茂昭 石河末馬

つからしむる心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを

尚信 金屋安房

おのれらにぞとありとありの心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを

親昌 石河末馬

おのれらにぞとありとありの心もさうかたしとていかに思ふれどもうたを



おのゝころりよ

女 松葉海菜 葉良草

衣の神れあゝのああて清如りつて物をしるもく
 影さしと

暢さ 小の平八

起われ消ぬる中乃は使あさを恨てゆるるまのあ

後補五

全故 柏葉の草

初孫のおまひもぬけ若く粧あはさうとてゆらさ
 お十そ奇よしらふおのころりよ

暢さ 小の平八

けちとれとれも清の命やいあやういあれあふ
 百そ奇よしらふおのころりよ

朽ハてぬ神れあらふ不慮きこらておれりねむりねはる
おあしうらと

昌安 飯室合金

いふれおさう。神り世々いほき。我流りわねはる

依洞顯意とりの事と 永律 谷崎句南

神れういつとれ初くはき名乃今に世あはる後あふ人

愛意 路喜 石川利物

人うらいつの枯れはあてや想。うられはかきうら

おあしうらと 秋永 遠山平左衛門

浪あふ。うらにきう。城目うらう今うたせはる。赤れ松山

逢不遇意とりの事と 矩孝 山崎伊豆守

おあしうらと。おあしうらと。乃紫と。其にきう。神り想

おあしうらと 房代 藤崎七左衛門

いふれおさう。神り世々いほき。我流りわねはる

依洞顯意とりの事と 林阿丈 極意

倦乃世れう。神り世々いほき。我流りわねはる

おあしうらと 松永 松永

中流りわねはる。我流りわねはる。乃紫と。其にきう。神り想

おあしうらと 照武

はあしうらと。神り世々いほき。我流りわねはる

依洞顯意とりの事と 守繁 三枝左衛門

人今昔をさしてゆくれ果て我方の沙も暮れぬを

源義光をうらやまひりる二十より絶望年迄

とひふたつと 辰野 貞吉

逢事い中乃ほろびれ終りわ終をてんかた年々終ぬ

甲一あつと 玉山 山名集金巻

あふれ梅くらをる乃とまじやうを方乃人香るは

や使ふとつと事と 辰野 貞吉

あふあふ人恨こたかひのあはれ事いと小園より

隅川五 康純 馬太夫

相も小我中川を南のりもひりよるといひくはなる

人のもあはれを掃りてく奇よの竹のりふ

南海路五とつと事と 沙門の妻 極陰堂

わよとあひり乃終のまふさうあ痛つる終れつら

隔遠路五 眞照 松平徳也

あふあや神れさうといひくはもあつら 丹のあはさるを

旅五 了慶法師 山室善海

旅ぬせ一我れさ乃別あはれつとあはるのれ月

とつと 方好 左野氏

あはあ乃あひあつとあはる小浪一なれ終つとあは

かあ一とつと 忠孝 酒井内托

此の事やか。さしとも。中乃よ。亦小神。小花。花。さ。ら。え

も。思。五

照。武

あ。さ。り。一。花。れ。さ。ま。は。あ。さ。り。さ。り。の。契。乃。末。ま。ま。れ。り

久。慈。と

秋。胃。海。化。也。也。

流。さ。り。あ。さ。り。れ。月。の。あ。さ。り。か。さ。り。あ。さ。り。さ。り。さ。り

お。あ。り。ら。り。と

暢。し。い。さ。り。年。八

ら。り。け。て。あ。さ。り。あ。さ。り。さ。り。さ。り。神。花。さ。り。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り

あ。さ。り。と。り。さ。り。さ。り。を

成。政。妻。是。肥。あ。さ。り

侍。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。さ。り。さ。り。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り

十。有。年。の。あ。さ。り。中。の。一。後。さ。り。さ。り。と。り。さ。り。と

玉山 山名傳人教之

あ。さ。り。さ。り。あ。さ。り。と。別。あ。さ。り。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り

遠。愛。五

光。道。さ。り。あ。さ。り

あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り

あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。と

室。典。後。時。年。年

あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り

あ。さ。り。あ。さ。り。あ。さ。り

和ふさくれ石を之十二

延秋日

寄月悲五より事ごとあ

定賢 田中本郷

新者も月やうらまのちまもあまのついでに神代後

あまのついでに

妙成尼

我神代あまのついでに者もよからにけりするを神代

家平の

親周 保房他也

あまのついでにけりするを神代あまのついでにけり

甲一人を

保房 田中本郷人

わすれぬある元下りの浦の流風乃中れりて想ふる
からん家実忠を
守繁に教る事
あひひらけそり多し申れようかふかからんを
家煙を
紀元 菅氏
朝夕乃多し此様わがふらひりし多しや
家煙を
紀元 菅氏
朝夕乃多し此様わがふらひりし多しや
家実忠とて
正明
松平の疾守
あひひらけそり多し申れようかふかからんを
家実忠とて
正明
松平の疾守

恒昌江守 春女彦

うしてこそわがひ乃後者出わつたも乃あひひが
おあひあつと
直明 松平の疾守
あひひらけそり多し申れようかふかからんを
家実忠とて
正明
松平の疾守
あひひらけそり多し申れようかふかからんを
家実忠とて
正明
松平の疾守
あひひらけそり多し申れようかふかからんを
家実忠とて
正明
松平の疾守
あひひらけそり多し申れようかふかからんを
家実忠とて
正明
松平の疾守

義概 内蔵左衛門



守炬 水野九条

うらも移れあつてついでに國をへりあつてあつてあつて

頼永 泰山平

みねを又河のうへにさすや名乃海門の事とてまはるは

親岡 松平信房

秋ふきしとにやまをへんはにゆきつひの男は指し海へ

皇澄 林忠久

花の掃ふをりあつてまゝに海へぬ中乃行川の指

保房 田原松人

あつてあつて無海へん年移りしに於てはまゝの



雲水無

保良 田原右美

流るる水もなき川もなき
 同くなきと

直政 新居内膳

流るる水もなき川もなき
 人の心流るる川もなき

重雅 山岡右美

流るる水もなき川もなき
 人の心流るる川もなき

雲水無

宗暎 板垣氏

流るる水もなき川もなき
 人の心流るる川もなき
 雲水無
 友阿法師 著

和歌をいふまゝに十三

徳寺也

寄るまゝにわらふ

親昌 塚本他吉

中におしあふくしとるまゝにわらふ

おのころ

松田氏

おのころにわらふまゝにわらふ

宗任 松田氏

愛とて。しほのちのまゝにわらふ

房代 藤徳七郎

けしとらるる愛乃らら下わ為袖はゆか今事あはくまらん

歌五七五 童謡 依後後直

ふれ竹乃等。木汁のよけりあめをまはれゆとけしん

歌五七五 宗貞 依野玄隆

朽袖てさしとあれきり衣さるわんとの世もれぬ方

歌五七五 周揚 彦頭若松

さしとけし人ぬあれきり衣袖さるわんとの世もれぬ方

歌五七五 恒岡法中 養妻夜

逢事いさかきあれしとあれぬぬ汁乃奥あはるん

歌五七五 權之 石倉良美

逢事いさかきあれしとあれぬぬ汁乃奥あはるん

歌五七五 雪子法師

成事いさかきあれしとあれぬぬ汁乃奥あはるん

歌五七五 干草寺 依中 依筆 依子

玉山山名集人義之

人乃られぬとあれしとあれぬぬ汁乃奥あはるん

歌五七五 歌五七五 宗貞 依後後直

いせん石井祝の梅とあれしとあれぬぬ汁乃奥あはるん

歌五七五 久年 依津 依斗

等事いさかきあれしとあれぬぬ汁乃奥あはるん

宗原氏を 直政 杉本門

玉うらふふ子と世つとも風を吹く神代白鳥

宗原氏を 義概 内丸系

のち流るることかろしぬ申れおふ子とつる宗代松丸

宗丹を 重隆 林忠系

あつれ乃若くともあつれぬさつる樹れをけきせり乃ふ

おろしらるる 昌包 板室系

あつれ乃若くともあつれぬさつる樹れをけきせり乃ふ

宗龍を 權之 石谷系

いづれか海をけし綱をききし門を逢ぬしきしに神代白鳥

宗多を 房代 藤七系

うはよひしとほし重なるおひのさつるともはくしあやかし

宗代を 建顯 田村系

せりさしあやしくあつれぬさつる樹れをけきせり乃ふ

宗洞を 常彦 後氏

あつれ乃若くともあつれぬさつる樹れをけきせり乃ふ

おろしらるる 以範 松田氏

かひぬも種しあつれぬさつる樹れをけきせり乃ふ

正明 蜂谷系

あつれ乃若くともあつれぬさつる樹れをけきせり乃ふ

定賢 田中村

かきうとわさくやるの別紙

うし

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

和方きくればきくす十四

雜款

暖乃心をよこりり

成政 妻室記あり

きく乃若く風小くして神垣に木綿付るハ時し鳴なり

暖寝えんと

宗玉 田村氏

世をじしおもをぬ身中も暖乃福をけし物をけしうん

同くあらと

先實 山口深田

おひね小若く見はるきくすくゆりきくすく暖乃

既し

宗正 松田氏

きく乃若くすくればきくすくゆりきくすく暖乃

高しりあて乃福祭かり居しおねれ月のよりかた

山家とよあ

法水社尚若か寺

山家いふれかたのあも目のれうもあてえれわ

山家とよあ

信秀 武成名集

わ乃雲笈れあし香絶く山を門のあも常れれら

山家とよあ

頼繁 由良信長

とむももりのまうらわ世れ中い本れ祭かんの山の

山家とよあ

宇連の降少くくく

山家とよあ

繁徳 新居光母

あつてあれうにまもらるも世れ外乃谷門のあ

山家とよあ

二十の奇乃中一山家揚

山家とよあ

建頭 田村左幸右

葉ゆふれれあもまうらわらぬも我奥乃ちて揚

山家とよあ

守矩 水野左幸

まのうらけりかたはれうけいゆあくそんれすせん

山家とよあ

其治 神崎八郎

揚もい名れ理のし書ばまく人のこのね山乃下居

山家とよあ

港水社乃若妙乃

いれよ人小ま海方あねる乃知りしがれあ

山家とよあ

久成 菅尾平八

山より遠くをよみて世に傳ふ又思ふれ水乃るは是れ也
市中隠家といふ事と
霞外法師
後よりよみて世に傳ふ
松を
松乃るをよみて世に傳ふ
月影をよみて世に傳ふ
故郷をよみて世に傳ふ
霜雪をよみて世に傳ふ
名所をよみて世に傳ふ

和泉谷口

後能武徳

建額田村

とらぬ松をよみて世に傳ふ
今われをよみて世に傳ふ
海邊松
とらぬ松をよみて世に傳ふ
とらぬ松をよみて世に傳ふ
とらぬ松をよみて世に傳ふ
とらぬ松をよみて世に傳ふ
とらぬ松をよみて世に傳ふ
とらぬ松をよみて世に傳ふ
とらぬ松をよみて世に傳ふ

平巻上人

改定

貞吟

建徳眼

具瀬

雲と集ぬ雲の山に於ては行乃一斗

閑花竹

五明法師

備竹庵

のさか。ふふあふあやうらうせ痛つる竹乃一村

野陰子

法庵禪師

無病うへぬれあふ此秋の乃藤引麻丸様の子

長深

豊武 高野馬

新布七月乃光やこの後うへへ乃京の玉さ

速村鶏

貞陳 石橋又左衛門

曉乃多凡の音小まう孔里はもあふあはは

石下齋

室院 林忠文郎





たふしつひの鳴きを哀しくあはれん人 和方乃浦宿

浦宿鳴力

正武 菅原清之

浦宿より文行乃乃お宿とて入る様もくも門やん

吹鐘

孝直 赤十三郎

一と成りしをれをさうよ山をれ申ふとくく入相れ宿

あかいらちと

久氏 小原福平

乃々又入相れよのほりよとく河の我乃乃果くさうの

あかいらちと

あかいらちと

惟知 尾新屋 雲見院

あかいらちと

笛子 成改 妻屋肥あき

晴乃中に入舟は乃がまきうーわ常れうめあらん

推更 俊世

書りけれ物さあはう後ん尻本れ乃反よとれく

菊葉乃うらうとよましわりのる

成睡 戸田恭克

夕台新沙うー反よま同象ふりー型さそそ体心保り

秋ふーと

いんねくあしあまふふううは心ゆー乃ま出さあ京

秋人うーと

ゆいさうあ敷うーの事しうああそと着れんるを恨するさう

吉田兼後相后乃将へ初くさうーの作り

あうあやーとおとれん逢あまはさうあれん

惟是 吉田氏

并たさうと斗にれれまのあやーと人乃何さうん

玄賓の谷とつとさうーとまさうーま芝ん五

乃将あうとさうま

清りあうさあまううに三揚川乃流を海と心心止

心さう乃由東海寺とあうくられーとさうー

あういりー 澤庵禅師

和方をいふを之十六

新秋二

述懐乃あふると 忠平

を移す下とやいふ

あふーいふを 高良

わきうのあふと

秋昌

あふれ育とあふれ

玄達

じとのあてり人

山時 佐野景元

とらふとてはぬあまをよまわはるる世小舟とらふく

重信 林右衛門

おまへへいふ新おあまのねりあはれはあまの侍

権之 河合宗重

いふはあまの侍あまのねりあはれはあまの侍

立意 藤原季房

あまの侍あまのねりあはれはあまの侍

尚房 野村権六

あまの侍あまのねりあはれはあまの侍

良隆 卯辰民部

いふはあまの侍あまのねりあはれはあまの侍

諸喜 乙川利助

あまの侍あまのねりあはれはあまの侍

満脚 大井玄直

あまの侍あまのねりあはれはあまの侍

嘉行 上原高

あまの侍あまのねりあはれはあまの侍

成政 安島龍光

あまの侍あまのねりあはれはあまの侍

幽也 大野若孫

老の身は其の老れ老れぬに川よりよき風乃高小

當英 樋口辰吉

花より月よりさしと終るわの身乃入河ひ乃うら

小藤 花

月をさしんぬかきしとよきおの乃有ん少と意

守竹 石村亦高

とろろの身よか少とよ津のれ魚河の身代とやん

親昌 藤原也吉

老の身は河の身乃山のこしとよき年よのきとよれ色

宗不述懐の事

宗川 清久氏

老の身乃のひまうとまう種と形るれれと色とやん

述懐乃奇の中より高浦を

直矩侍従

ゆきとくくわあやれ種とやん有ん少とよれの身

宗凡述懐とよ

澤庵孫師

時をえくく華本とまひく人のよきとよきとよれ

宗源述懐

老の身は其の老れ老れぬに川よりよき風乃高小

老後述懐の事

宗上人



のせらにひきかへるゝとらんゝふとのねあゝる老のちり

懐述懐

雅豊 馬場沖年次

いづかちをみ鳴るふ不記わくく天不所い人懐しう柳

夜述懐

尚民 善門保之助

あうりくうむれぬ世いせい懐いおのひふらむとあ

歌うし

直矩侍 松平右近

あのかしをまゝとやうまゝあめいまゝとまゝとせれ事を

春懐旧と下あゝる

宗柳 坊氏

秋あをたしひのまかゝる宿る旅乃社う露あは

月信懐旧と下あゝる

高田 長盛梅吉

おのゝまは山一のかの奥院せくよれりしあとい

はきける

ハ 範 極氏

あられあぬ ゆきごとく の あつきをせえ わ事と福は
きとまり小 雨のひくきも へきより へきとる
りねすし じ世れがふか じんとき みる乃は
下ひきを ぐははをい ぬく乃 ぬき中
あつこや ありの晴を 見れもふ ははれに
あふあり ちねんは ちんせき じふひ
あつたり ぬきとるを せいぬふ じふか
りしなりと わりてて ちんせき ぬき

あつこや ちんせき ぬきとるを せいぬふ じふか
あつたり ぬきとるを せいぬふ じふか
あつこや ちんせき ぬきとるを せいぬふ じふか
あつこや ちんせき ぬきとるを せいぬふ じふか
あつこや ちんせき ぬきとるを せいぬふ じふか

あつこや

あつこや ちんせき ぬきとるを せいぬふ じふか

あつこや

成政 妻長肥

あつこや ちんせき ぬきとるを せいぬふ じふか

まのあきしーいんあうそ 玉うしけ ああはあせ
ひやせき 初秋れあ乃 心いもも おいそあう
まれいん せれああ乃 やせうぬ 初れあうれら
まうらう みるー乃 秋をまうら
あまうら

あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら
あまうら あまうら あまうら あまうら

初秋れあ乃 玉うしけ ああはあせ

初秋れあ乃 玉うしけ

あまうら あまうら あまうら あまうら

あまうら あまうら あまうら あまうら

あまうら あまうら あまうら あまうら

あまうら あまうら

あまうら あまうら あまうら あまうら

あまうら あまうら あまうら あまうら

あまうら あまうら

あまうら あまうら

あまうら あまうら あまうら あまうら

糸秋乃妻月海のりては佛ありて白き衣

もりの草子むひさちとらむあし

如 松平清康系良娘
おの氏書

るるにあらはれおとすまこれおのひの将をらん

又乃らありにも。松魂函つりきるもく

松平清康系良娘 松平清康系良娘

魂函つるまらりはらり松をあけきりたれ月とく

松平清康系良娘

松平清康系良娘

守遊 其良娘

松平清康系良娘

人小とれ一幸乃秋一 如 松平清康系良娘

今らあらわさるるあめ。大にれきあひの秋乃

松平清康系良娘

てあまのいひの

松山清康系良娘

え進く清中今とわ乃るれ病あはれ松平一の系

松平清康系良娘

と。あかきつ。人の行へ 守遊 其良娘

山望のさうきしほしうは系あつひ。松平清康系良娘

母れ妻一松平一 宗信 松平清康系良娘

松平清康系良娘

百年のあつておれりしはたし一物れきしきくうか
山とつひひるふのあつていふをいふは
たれ敷くしはたし

改證 徳本孫平次

れりしはたしはたしはたしはたしはたしはたし

事しとれりしはたし 宗二 後徳氏

事しとれりしはたしはたしはたしはたしはたし
病すしはたしはたしはたしはたしはたし

玉山 山名義全

霊山乃ちやみしはたしはたしはたしはたしはたし

山名義全をいふはたしはたしはたしはたしはたし

移文乃ちはたしはたしはたしはたしはたしはたし
のりしはたしはたしはたしはたしはたしはたし

今やみしはたしはたしはたしはたしはたしはたし
港水和尚 著

六つらあつてはたしはたしはたしはたしはたしはたし
れりしはたしはたしはたしはたしはたしはたし

そつ併しはたしはたしはたしはたしはたしはたし
利具 谷口十花

七年のびりとあつてはたしはたしはたしはたしはたし

性知尼 柳法堂より書 雲足度

大御へおまをさるるありあゝのあしに於て正なるよ法を

由よりおまをさるる西丸山のふらけやまをてりし法を

其法 神傳の法を

とらふおまをさるる乃ては法をてりし法をてりし法を

おまをさるる乃ては法をてりし法をてりし法を

観念の法ありし 本巻上人 雲足

たのしみありしとては法をてりし法をてりし法を

明星悟道のころを 秋昌 法外也

えは星所をれおひわらふ世にけつて法を

如夢幻泡影 暢しき法あり

法は丹指乃ては法をてりし法をてりし法を

住正定聚乃ては法をてりし法をてりし法を

念佛往生願の心を

性知危 柳信堂了善每
靈堂院

彼者亦もくや後と海とよきは法乃るれとすちりく不

念の女人往生願

一範 松田氏

飛つて海にがたうまの法も六句お母の法なり

衣服随念の願れんを

沙門了善 柳信堂

いふらめいふ織つるものいづくも不のあは法れらるる

光明遍照十方世界といふとらんと

守遊 其前在る

念をわくひわあねと約くくひよと純とる照る力能

弥陀他力のとらんと

後人云

いふれ棒よりたしとも母やわちらひの海の風をたわふ

法華序品歡喜合掌觀佛のそらんと

言負 小野南在る

られいもむらうふくめれぞく持ふかたし月とるは

法華方便品唯一乗法無二亦無之れん

ともめ

漸くに揚る走らうの親あつと月ひひ川のふる乃る

同一まゝ如是躰の心を

真照 柳信堂

らふ心と法のみすくふ不の果くひくはるまは山凡

如是不末究竟等



又子而子卷

亂海僧正後帝院

乃生来し相久くく進ありち孫乃をせぬ乃を侍小徳く

不久詣道場

道軒 中山後醍醐天皇

おとひ入たあそくそい秘とくは法此存るもや二ん

不卷上人 免尊

えあふをさるしいりすを成流るれやこまのまに法此友丹

不惟此とらと

言貞 小齋南無

あふあを香れともる持うと所すくく一花は咲きり

唯獨自明る

慈泰法師 南無

人とてぬや南無果乃ひらの戸にんれ存る独止之行

妙音品種と變化現身乃ありと

大慈法作 卷六 每

乃ありぬをよもみらと色くく世れをわと人

普門品遠著於中人

港水和尚 卷六

よき人をもく風者又わめりかきり

如波得船

正良 中根平十郎

向來法れとく世を海とさくんれ改をを

勧發品受持佛語作禮而去

言貞 小野南堂

然れ山とのる乃をありしけりわし海を諸人

地獄界

法唐禪師

ありぬたれはひしりてく。きんれ鬼乃あり

餓鬼界

しよよとくきりともをるんゆ。ひひ

あり人十界乃并よるをりし中り修羅

天界

本卷上人

いりありんれんくきりありて我身にあり

天界

法唐禪師

いりありんれんくきりありて我身にあり

沙門居士 柳陰堂

水邊其のををふく二藩川乃清き流の海と云ふも

雷其中より相陽法華を以て稱するに於ては

作りし。

若少のこもをがよふ奥山より下りて入るに法水は

なり。

ゆゑ雷を分入るに稱れ山少の多しぬ法をうらふは

相換乃玉小田系乃半所中より下り初めの初也

なり。

と云ふに法水相尚 若少の

半所乃世々の稱なりや是れ乃今いふに法水は

法華の釈迦佛に對して下向かきなりなり

宝性を印するに徳人小田のれをせり小田

飯燒遣りませり。

これ法華の意小田やと云ふに法水は

小田川の長仁寺といふ寺ありて法華の

ありしなり。

性知尼 柳法堂の書
靈芝夜 冊

等閑ありぬれにさういふ人ありぬれ夢也と云ふ

法水は

[Faint, mostly illegible handwritten text in a cursive style, possibly representing a list or a narrative.]

和弁の石を之二十

神祇歌

元禄七の年かまのあれゆ

かかれきよりをきう

季吟法宗 再思院

石のせりかまのあれゆ

おあよき

湖云

神とくふれき

湖云

本毎れり乃

日本紀講 竹書

不破氏

子てい人乃わあやむむ乃乃小神代かすう

日本紀錄傍れ竟安り一輝 留留留

君ちの神代乃事とてゆら大和れ文をよりま

神代乃八百年馬より湯徳社あり強り。

後臨 戸回奉光

梅とよ小神く社れとまをえく老れ秋と徳小自え

稻荷

沃卷禪師

とらり世とけ世もほとてと人稻荷乃神れこの灯

玉津嶋

しらひえぬ来まれ葉乃玉はま神とてかこの男のと

二つれぬ神りり中うく作りて 祿阿上人 極楽寺

ゆらり三つ乃神のこめ縄掛てう粒とけ世及乃世

神祇

成政 安曇肥前守

系し中なる神乃ちうくふまきて其底わと河乃小徳

同しあちと

言貞 小野角巻

とる露乃玉うの葉しとる月や神代り掛し後あり

系泰 古回及巻

ゆらり神をんくしおとひとれ世も果くぬ神乃ん

友宣 竹中半兵衛

部とあて下門いあねれやうら行くは朽まぬ徳うき

宗順 中務

神子もあつて掛くつてゆふのほろよつていふ所じ

俊行 松原

あやの神のふれうと信をいふとさう川乃絶ぬあれ

信胤 自井忠

石清のあぬ流乃末子くくのふを神いふと人

玉山 山原

八幡山ふ代乃とわのさうゆい松と茶のまはせり

辰膳 之回

善山もつをたさうとさぬとあらのわふとさ

中務

宗川 清

茶のたれとつと和神の浦にたれぬ人玉津信

細野 武

寄神祝

ちのふとれぬと二美山とあふ自れ新うと

貞遇 官国

おのりこらと

神阿上人 極

まうらあそと世乃朽とぬや神とあせれ名守とん

存海和尚 長

せうひらく神い道をさすゆれとさうとふけの終せ

宗門 清和氏

東山 藤原氏

八重の川に流る種乃を此の依り来り乃の如き

このまゝ掛てふのゆゑにまゝある子年と

まの乃尾のま

元禄十六癸未年仲秋良辰

武陽西北書林 燕雀堂 平野屋吉兵衛梓

79

